

思いやりを育てる援助の在り方
—— 身近な人々や自然との触れ合いの中から ——

南風原町立北丘幼稚園教頭 仲 里 竹 子

目 次

I	研究テーマ設定の理由	11
II	研究仮説 4	11
III	研究の全体構想図	12
IV	研究内容	13
1	心の発達	13
2	幼児期の発達の特性	13
3	発達の方向性	13
4	思いやりの心の捉え	14
5	思いやりの心を育てる援助	14
6	調査研究	15
V	保育実践	16
1	活動名	16
2	活動設定の理由	16
3	ねらい	16
4	内 容	16
5	展 開	16
6	活動の流れ	17
7	考 察	17
VI	実践事例	18
1	祖父母参観	18
2	S男の小動物との関わり	18
VII	成果と課題	20
	＜主な参考文献＞	

思いやりを育てる援助の在り方 —— 身近な人々や自然との触れ合いの中から ——

南風原町立北丘幼稚園教頭 仲 里 竹 子

I 研究テーマ設定の理由

近年、変化する社会の中で幼児を取り巻く環境は幼児の心身の発達にひずみをきたすような出来ごとが多くなっている。少子化、核家族や共働き、間接的情報に囲まれた生活、家庭教育力の低下等で他者と触れ合って遊ぶ機会が少なくなり、幼児の心の発達に関わるとされる他者との喜び、悲しみ、辛さ、痛さ等を共感し、葛藤する体験が希薄となり思いやりの心を培いにくい現状である。

幼児期は生涯学習の基礎となる根っこの教育の時期であり、その時どのような生活経験をし、それをどのように積み重ねたかによって、人間としての生き方に大きく影響するものと考えられる。

中教審答申の中にも「幼児期は自我が芽生える時期と他者の存在を意識し思いやり、自己を抑制しようとする気持ちが生まれるようになる時期である」と述べられている。

このことは、幼児が親や教師等大人に愛され、自分の存在が認められ、受け入れられているという安心感等を基盤に人間として生きていくために必要な要素が芽生えていくことである。なかでも、豊かな人間性を育むための『思いやりの心』は幼児の身近にいる親、友達、先生等との触れ合いや、自然、絵本等の教材と対等に向かい合い、心と心が響き合う中に培われていくもの考える。

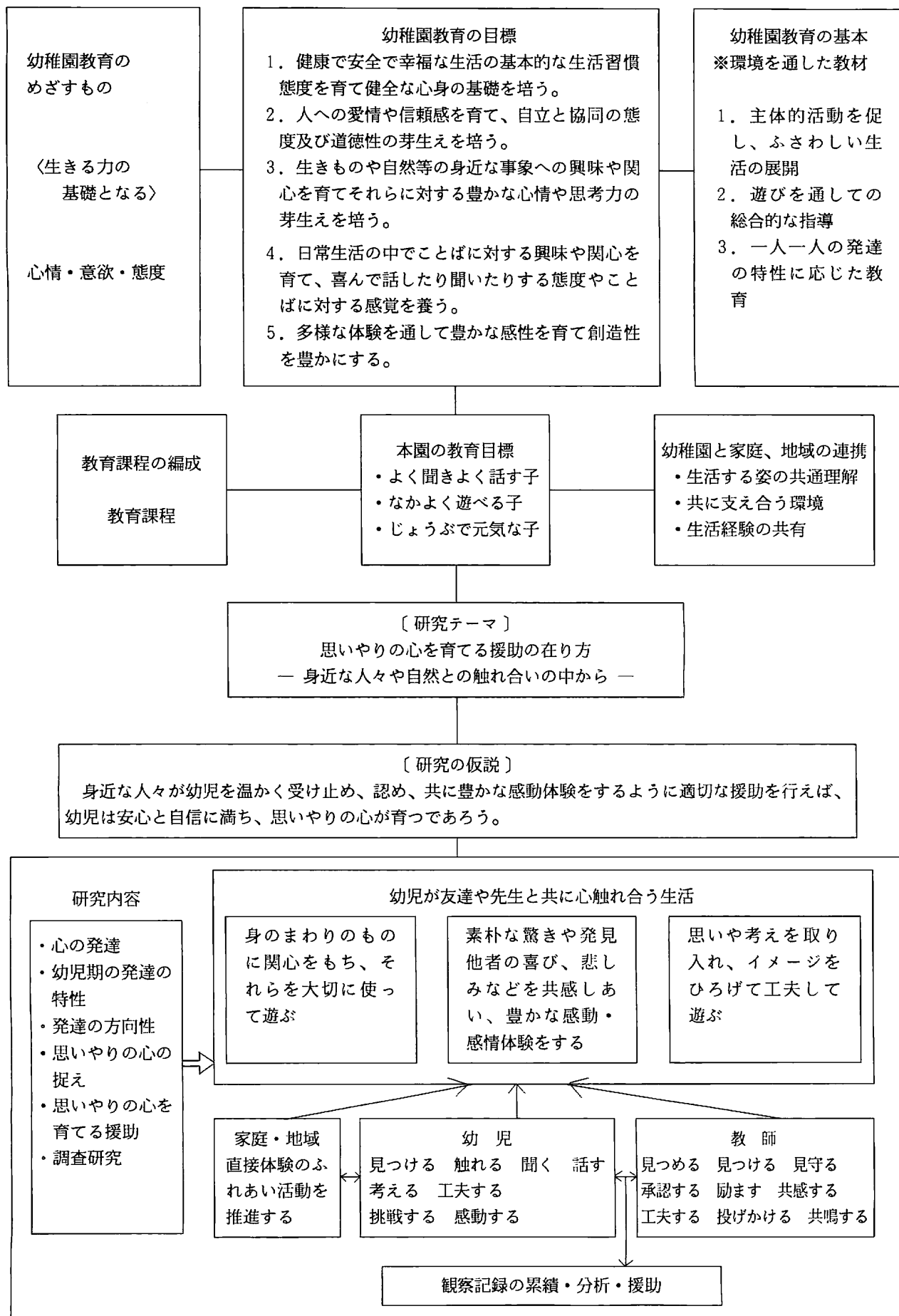
実際、幼稚園の遊びの中で『グループ意識が強く、友達以外の幼児を仲間にいれない子』『相手の意見を聞こうとするよりも自己主張の強い子』『友達とうまく関わって遊べず、友達のよさに気づかない子』『言ってはいけないことを言ったり、してはいけないことをする子』など5才児の発達の過程とはいえ、他児の立場になって物事を考えることが乏しく相手を傷つけてしまう行為がしばしば見られる。また、私達教師も日々の保育を振り返って見ると、幼児の行動を見守るゆとりを失い、性急に指示や教えこむ傾向があったのではないだろうか。幼児一人ひとりのことばに耳をじっくり傾け、場に応じたことばかけや一人ひとりの良さを認め、援助してきただろうかと考えさせられることが多い。

そこで、他者への思いやりの心を育てるためには、身近な人々や自然との触れ合いの中で一人ひとりの発達に応じた適切な援助をすることにより、培われるであろうと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説

身近な人々が幼児を温かく受け止め、認め、共に豊かな感動体験をするように適切な援助を行えば、幼児は安心と自信に満ち、思いやりの心が育つであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 心の発達

幼児の生活は、親の価値観の多様化でめまぐるしく変化しつつある。そこで、幼児に豊かな心情を育むために心の発達段階についてエリックソンの理論を参考にして表にまとめた。

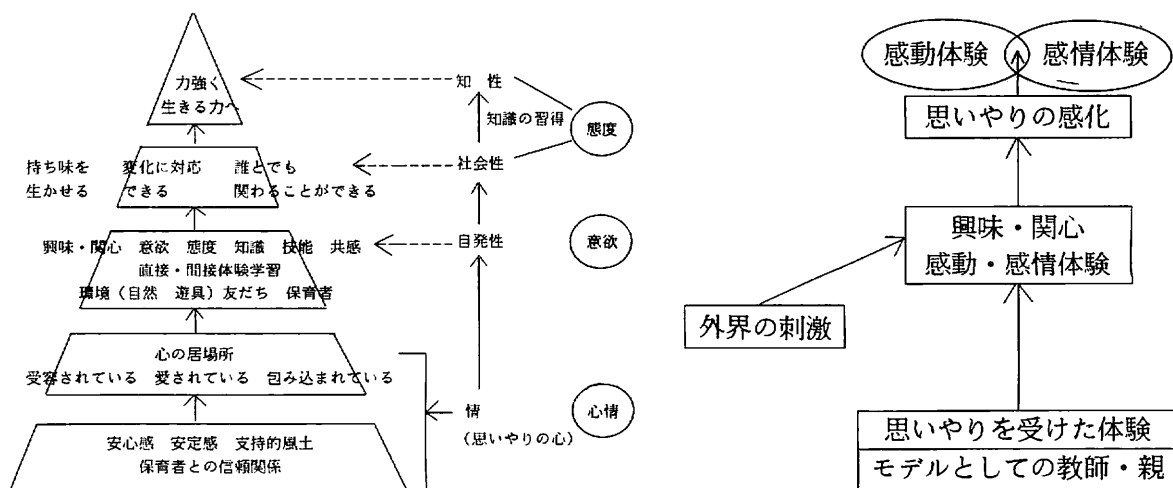
発達段階	親子の間隔	発達課題
乳児期（0歳） 「肌を接する時代」	（0.3メートル前後） 親子の体臭や体温を感じ合う距離	基本的信頼関係を獲得する時期。「オギャー」と泣くとすぐ対応してくれる山びこ体験の時期。 〔育ち→信頼感対不信感・不安・無気力〕
幼児期（1～3歳） 「手をかける時代」	（1.2メートル） 親子で手をつなぐ距離	自律性を獲得する時期。親は排尿・排便のしつけを通して、子供の自主性・自尊心・責任感を築く。 〔育ち→自律性対自分の力への疑惑と恥を感じる〕
幼児期（3～6歳） 「目をかける時代」	（3メートル以上） 目や声が届く距離	自発性、積極性を獲得する時期。「あれなあに？」「どうして？」等、積極的に聞いたり見たり触れたりする直接的な働きかけによって自発性が育っていく時期。遊び仲間をもつようになるとともに自分に対する自意識が形成される。〔育ち→積極性対罪悪感〕
学童期（6～12歳） 「心をかける時代」	心身成長とともに独立して親から離れる	勤勉性を獲得する時期 〔育ち→有能感対劣等感〕
青年期（12歳以降）	親子関係より仲間関係を大事にする	自己同一性を獲得する時期で自分自身を客観的に見つめる時期〔育ち→自我同一性対自我同一性の拡散・高校生以上に見られる退却神経症〕

2 幼児期の発達の特性

- (1) 身体が著しく発育すると共に、運動機能が急速に発達する。
- (2) 大人への依存を基盤としつつ、自立へ向かう時期である。
- (3) 生活体験から得た自分なりのイメージを基に物事を受け止めていく。
- (4) 信頼や憧れをもっているものを模倣したり、取り入れたりして同一化する。

3 発達の方向性

子どもは心身ともに日々成長している。人格形成の発達にはまず「情」（思いやり）が発達して安定していく。次に「意欲」（やる気）が発達し、更に「社会性」（適応能力）が発達する。次に知識が習得され「知性」が発達し、生きていく力が身についていくと考える。



4 思いやりの心の捉え

思いやりの心とは、相手の立場に立って考え、自分も大切にし、人や物も大切にすることである。また自分がつらさを感じなければ相手のつらさも分からないし、つらさを乗り越えた自信がなければ、相手を思いやる心の余裕が生まれないであろう。

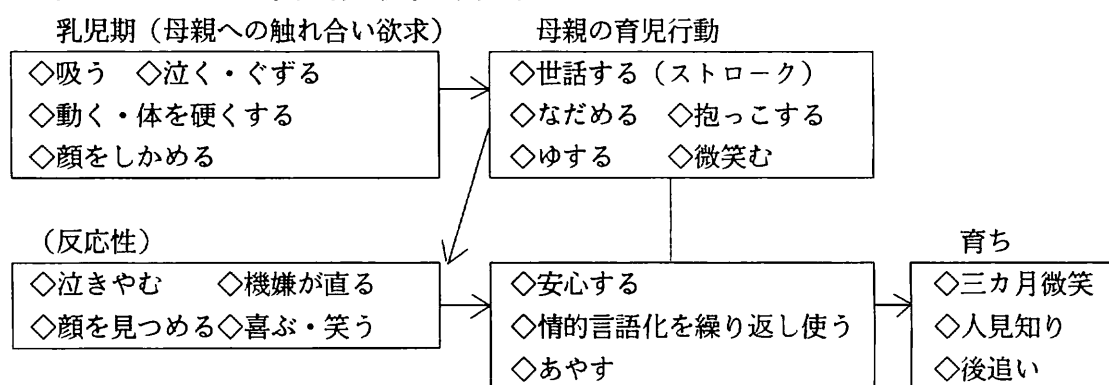
幼児は、親や家族、更に教師に支えられて生活する中で、喜び、悲しみ、葛藤などの感情体験を積み重ねていく。そのうちに他児を理解し、同じ気持ちになって共感したり、周りの信頼や憧れをもって見ている人の言動や態度などを模倣したりしながら、思いやりの心が自分のものとして身についていくと考える。

5 思いやりの心を育てる援助

・幼児期の発達は一面的でなく、いくつもの道筋がある。子どもの伸びようとする芽を見つめながら温かく守り育てることが必要であろう。思いやりの成長発達を乳児期、幼児期に分けて親の関わり、教師の援助、友達の関わりについて考える。

1 家庭における親の関わり

(1) 発達の基盤になる乳児期の親子の関わり

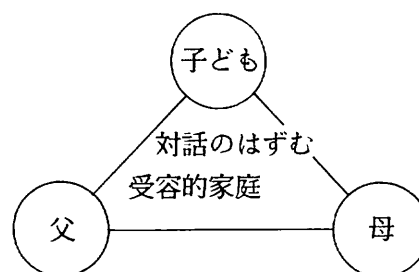


(2) 幼児期の親の関わり

心身の成長につれて、行動範囲が広がり言葉も活発になり、感情表現も多様になる。

母親の育児行動（温かい受容的態度）＝ストローク

- ◇話にじっくり耳を傾ける。
- ◇相槌を打つ。
- ◇微笑む。
- ◇語る。励ます。ほめる。



- ・幼児と共に身近な人々や自然・絵本やお話等、心動かされる感動体験をさせる。
- ・友達を求め好奇心旺盛な時期であるから他の子ども達との出会いの場をつくる。
- ・生活語「おはよう」「ありがとう」「こうしたい」等が使えるようにするため親がそのモデルになって使う。
- ・子どもの目の高さになって温かく見守る。
- ・手伝いの中で家庭の一員として役割を実感させる。

育ち

- ・ものの見方と感じ方
- ・優しさ、思いやり
- ・身の周りへの興味、関心
- ・人と関わる力

2 幼稚園における教師の援助

幼児が望ましい方向に向かって主体的に活動を展開していけるような適切な援助を行う。環境に関わって活動する幼児の姿を予想し環境を再構成することや承認、激励、助言などの直接的な援助を行うことが大事である。

	幼 児 理 解	環 境 構 成	直接的援助(言葉、表現、行動)
育 ち	幼児の安定感 ・ 幼児と共に生活。 ・ 興味関心を捉える。 ・ 心の動きと育ちを知る。 ・ 信頼関係を築く。	様々な感情体験 ・ 友達の存在 ・ 心触れ合う生活 (研究構想図より)	思いやりの育ち ・ 幼児の遊びの保障(場、時間) ・ 満足感、成就感の体験 ・ 友達の関わりへの仲立ち

《具体的援助活動》

- ・ 幼児をありのままに受け止め、安心感をもたせる。
- ・ 幼児と共に生活する中で様々な感情体験を共有し心と心が響き合う関係をつくる。
- ・ 一人ひとりの発達に応じた言葉かけの工夫をする。
- ・ 信頼関係を基に幼児同士の仲立ちの役割をする。
- ・ 方向性をもって、時期や個々の状態を考えて援助する。



見つめる、見つける、見守る。
承認する、励ます、共感する。
共鳴する。
工夫する、投げかける。

6 調査研究

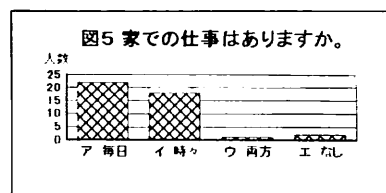
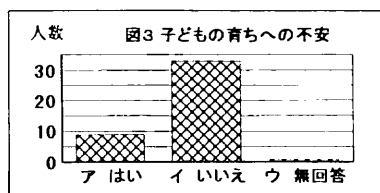
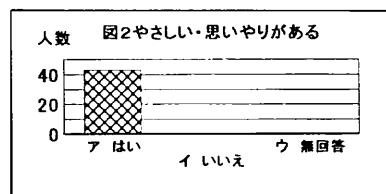
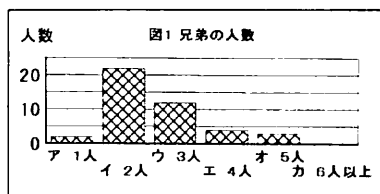
- (1) 調査目的・・・幼児の取り巻く環境を把握するため保護者に依頼してアンケート調査を実施した。
(家族構成・幼児の遊び・思いやりの捉え・祖父母との生活等)
- (2) 調査対象・・・園児108人 (50%回収)
- (3) 調査月日・・・10月17日
- (4) 調査方法・・・質問紙法
- (5) 調査結果と考察

幼児は自己の欲求を受け入れてくれる親や教師と、時にはケンカ等で対立する『兄弟、姉妹』や友達の存在があって社会性が培われ思いやりの心が芽ばえていくと考えられる。

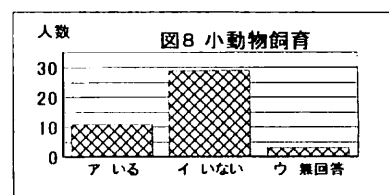
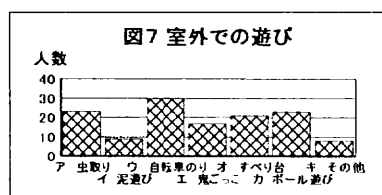
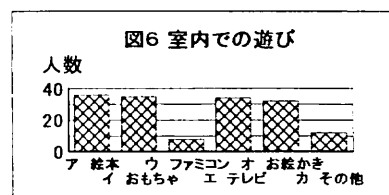
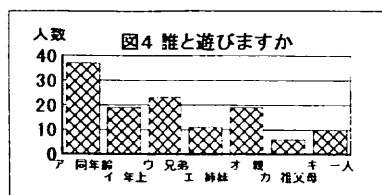
- ・ 幼児や兄弟人数は、二人兄弟が最も多く半数を越えている。

次に三人兄弟が27%一人っ子5%であり、少子化傾向で心の発達においては、ケンカなどで、悲しいつらい、悔しい等の思いを経験する場が少なく、思いやりの心が育ちにくいと考えられる。(図1)

- ・ 親は子育てに自信があるようだが、園での様子と違うところがある。そのため早期教育に目がいきがちであったり、全く放任であったりで心の面からの育ちが不十分であるように思う。(図2・3・5)



- ・ 幼児の遊びは、恵まれた自然の中で虫と触れ合う53%、絵本と親しむ81%で大変良い傾向であるが、一人遊びが22%もいることは気になる所である。(図4・6・7・8)



- ・ 祖父母の関わりでは、祖父母同居21%、良く行き来する87%、祖父母が親の相談相手48%を示し、幼児はお年寄りの温かさや思いやりの心に触れる機会に恵まれている。
- ・ 幼稚園が人間関係を学ぶ場であると81%が認識している。今後、幼稚園の役割が重要になると考えられるので、幼児を望ましい発達へと向かわせていくために家庭、更には地域との連携を深めていきたい。

V 保育実践

1 活動名 砂や水、土を使って遊ぶ

2 活動設定の理由

幼稚園教育の基本は、環境である。幼児は自分から周囲の環境に働きかけ、人間としての生きていくための基礎を培っていく。

幼児は、身体を動かしながら「砂、水、土」にかかわって遊ぶことが大好きである。この教材を使って遊ぶことによって、幼児を望ましい方向へ発達を促すものとする。

○ 素朴な遊びの中で幼児に喜び、発想、造形、知恵、疑問、驚異、期待等が体験できる。

○ 可塑性に富み、自主性、自発性、積極性が培われる。

○ 他児の刺激を受け、意欲をかきたて周りの人々との関わりを深めて、遊びが展開しやすい。

・ 全身を使って遊ぶ楽しさ。

・ 遊びそのものの面白さ。

・ 可塑性があり、作ったり壊したりが繰り返しできる。

・ 感触を味わいながら素材の特性、不思議さ、意外性等存分に味わえる。

・ 個々のイメージで自ら遊びを作りだし、主体性が確立でき、個から集団遊びへと広がりやすい。

幼稚園では安定した環境の中で、一人ひとり発達の違う幼児をありのままに受け止め、深い愛情と信頼関係で支え合うことによって、幼児は、砂や水、土遊び等を、友達と一緒に夢中になって遊び込んでいく。その中で「やった。」「できた。」等の満足感を味わうことで自信へとつながり、他者を思いやる心が芽生えていくと考え活動を設定した。

3 ねらい 自分の思いを友達に伝え合ったり、受け止めたりしながら遊びを進める。

4 内容 友達とお互いのもってる思いやイメージを伝え合いながら協力して作ったり遊んだりする

5 展開

時間	幼児の活動	援助
9:00	朝のあいさつ	・ 幼児一人ひとりと心の通い合いができるように関わる。
	所持品の始末・シールはり	
	砂場で全身を使った構成遊び 山・川・温泉・橋・トンネル	

10:00	工場作り	止めながら方向づけをしていく。 ・自分の考えを出したり試したりして、遊びが進められるように促す。 ・友達と力を合わせて山・橋・温泉などを作って遊ぶ中で感動を共有したり友達の良さを認め気づかせる。
	砂場でのごっこの見立て遊び 食事・ケーキ作り 爆弾・ばくはつ・ころころ	・生活体験を通してイメージが膨らむような声かけをする。 ・砂場や園庭でごっこ見立て遊びが繋がった場合には協力して遊ぶ楽しさに気づかせる。
	園庭で土や砂を使って遊ぶ だんご・ぜんざい作り	・幼児のアイデアを取り上げて他児にも気づかせていく。
	片付け 手・足を洗う。 話し合う。	・友達と協力してスムーズに片付けられるように環境を整える。 ・砂や土などお互いにきれいに落ちているか確認するように促す ・楽しかったこと、困ったこと、考えたことなどについて話し合い明日への意欲につなげる。

6 活動の流れ

水いっぱい衣装ケース

Y男、手のひらを水に写す「しゃしんだ。」水をたたき「ピシャとしたらなみだよ。」

川づくりでトイとトイをつなぐ

S男「こっちまで水ながせ。」A男「あゝまたみずなくなる。」

S男、木の枝をさしだす「せんせい！棒みたいで折れないものない。」

T字型トイを使う

A男「よかった、はやくしよう。」「こんなじゃない。」「ここつかまえろ。」

Y男、水の勢いをだすためにレンガを持ってきてトイの高低をつける。「せいこうだよ。」

「ぐるぐるゾーンだ。」水が勢よく流れ川であわをたてて沈んでいく。

トイに雨をためて川に流す

R男、S男雨にぬれながらトイを何度かもちかえて流す工夫をする。

だんご、ババロア食べ物作り

R子「せんせい、かたいだんごできた！」「ほら、ババロアできた。」

教師「ほんとだ、かたいね。」「おいしそう、たべていい。」

T子「どんなしてつくったの？」 R子が作り方を教える。

片づけ

教師「砂一人ぼっちだとさびしいじゃないかな？家族の所に行きたいと言っているよ。」

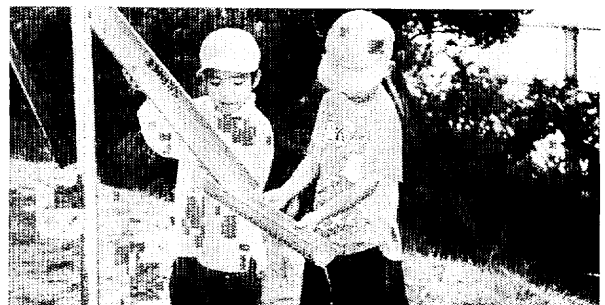
7 考 察

○水を流すという活動の中で、お互い認めたり、「ちがう、ちがう」と言われとまどったりしながら共通のイメージが膨らみ、探求心が培われていくのであろう。

○関心を示さなかった幼児二人が、突然の雨の刺激を受けて心が揺さぶられ、他児の遊びへとイメージが繋がっていった。

○偶発的なことから発見したり、感動したりする姿が見られた。

○教師が物を大切にしたいとの思いから“砂の命”について話をしたところ、友達同士声をかけ合い片づけをし、「おもしろかったね。」と話しながら部屋に入ってきた。



VI 実践事例

1 祖父母参観

ねらい：おじいさん、おばあさんとの触れ合いを楽しみ敬愛の心を持つことができる。

幼 児 の 心 情 及 び 活 動	教 師 の 援 助
・おじいさん、おばあさんについて話し合いプレゼント作り。 「おじいさん、遠くにしかいない」「病院にいる」「先生教えて」「保育園でやったことあるから教えてあげる。」	・祖父母の名前、年齢、出し物など聞いてくるように促す。 ・祖父母が元気であることを願いプレゼント作りを励ます。
おじいさん、おばあさんと楽しく ―当日― ・祖父母を迎えて名札をつける。「先生今日おじいさん、おばあさん二人来ている。」祖父母と一緒に遊ぶ。(踊り、歌、昔話を聞く。草笛を教えてもらう。お手玉するのを見る。) 「ガンバレ」と声援する。	・祖父母の来園を喜び温かく見守っている。 ・祖父母が来てない幼児はさびしい思いをさせないように配慮する。
・おやつ→片づけ ・幼児は祖父母と向かい合う。祖父母が来てない幼児は友達や先生と向かい合う。「ワァ！よかった。ぼく大好きだよ。」 「おいしい。」 ・「みんなでやると楽しいね。」	・楽しい雰囲気をつくる。 ・幼児に自分達で出来る事は進んでやるように促し充実感を味わわせる。

考察

- ・幼児と一緒に遊んだり、昔話を聞いたりしながら祖父母の温かい心に触れ楽しそうにしていた。
- ・祖父母の声「ありがとう楽しかったよ」「昔思ひだすさぁ」などの声を聞き、幼児は心動かし、相手の気持ちを大切にすることを学んだのではないだろうか。

2 S男の小動物との関わり

S男の姿

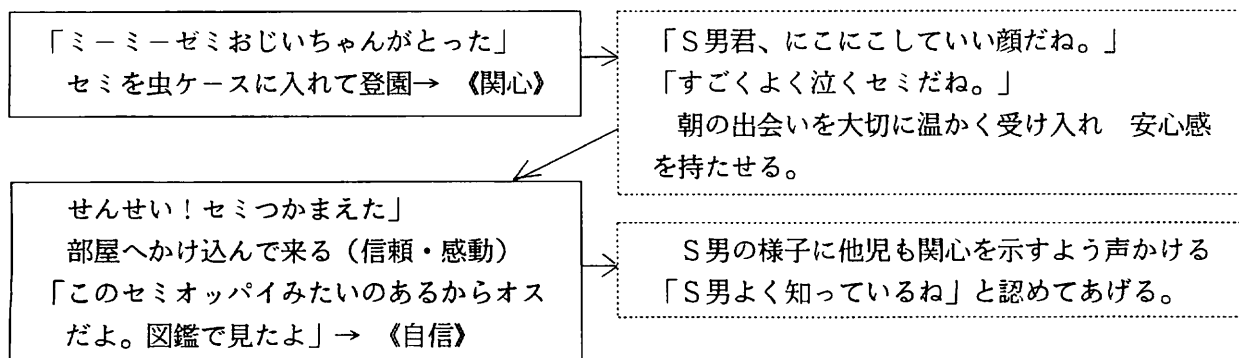
一人遊びが多く、遊びを始めてもすぐ違う遊びへ移り、他児の遊びを邪魔してしまう。友達と遊びたい気持ちはあるが仲間に入れない。

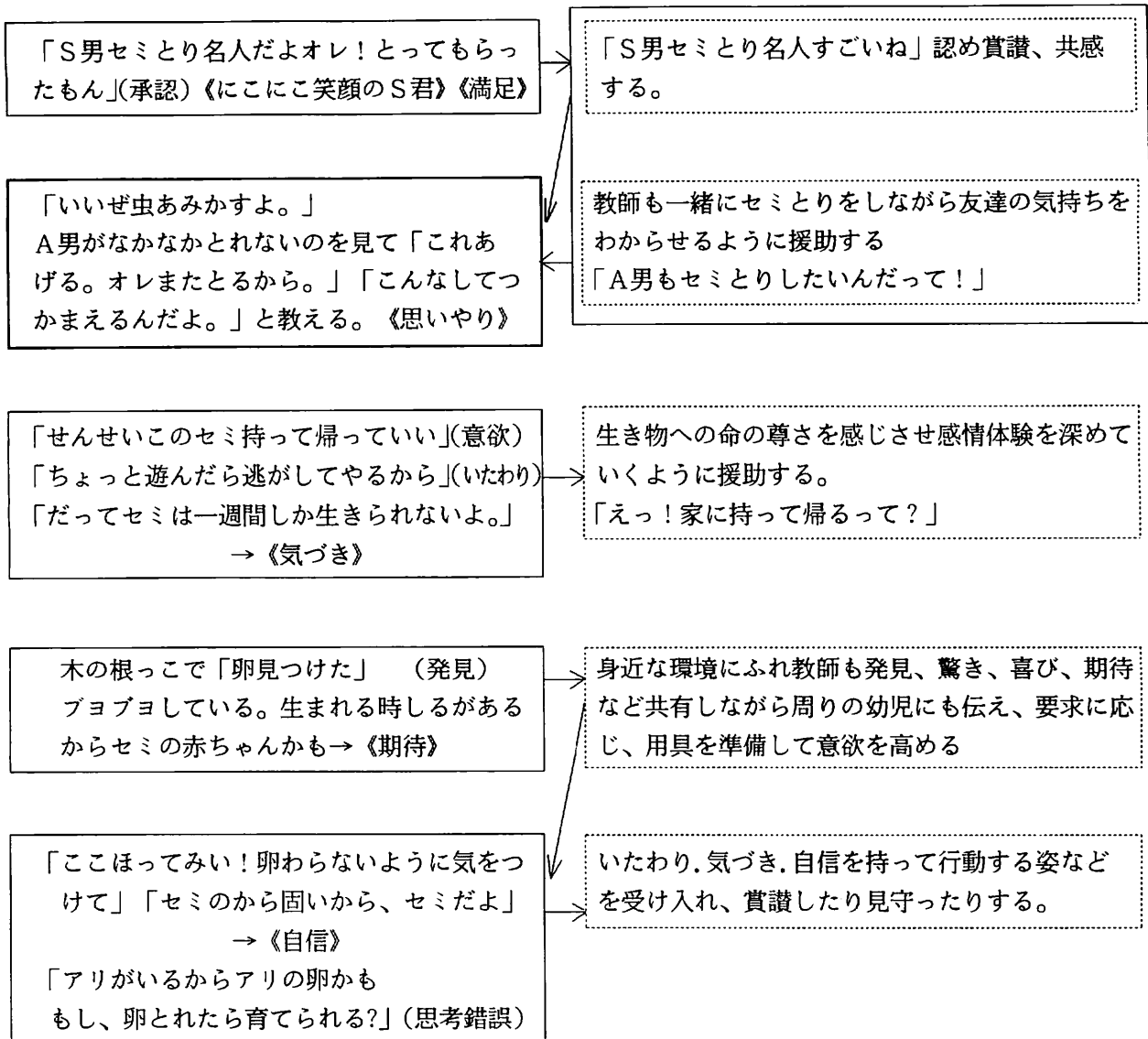
5月上旬、数人の幼児が「ひよこ」と遊んでいた。

「かわいい！あったかい！ふるえている！かわいそう！」と言いながら枯れ草を集めて部屋づくり。そこへS男がバケツいっぱいエサを運んできて、バラまく。次にひよこを追いかけて水をかけた。口々に他児たちは「かわいそう。」「ピーちゃんびしょぬれ。」「S男、なんでやる。」と止めた。他児からS男がやったと言われ気まずそうである。翌日ピーちゃんは死んでいた。他児達は、お墓を作り埋めたが、S男はどこかへ行ってしまう。

幼児の姿 《 》 S男 () 他児

教師の援助





〈考察〉

- ・ S男は『ひよこ』の死を通して、生き物はやさしくしないと死んでしまうこと、『人が嫌がることをしないこと』、他児との関わりや遊ぶ楽しさなどを、知っていったのではないだろうか。
- ・ 5月、6月ごろS男のことがクラス、園全体で話題になるので何度か母親と話す機会を持った。しかし、迷惑になる行動を認めようとしないで自信に満ちた姿は、社会性発達検査からはっきり表れた。S男の良い面「セミとり名人等と他児から言われ、友達とも仲良く遊べるようになりつつあります。」等話すことで、少しずつ耳を傾けるようになってS男の変容につながっていったと思われる。



VI 成果と課題

1 成果

- (1) アンケート調査によって、幼児の家庭での様子や保護者の考え方を捉えることができた。このことは、幼児の思いやりの心を育てる援助の手がかりとなった。
- (2) 幼児は、友達や教師に受け入れられ、認められながら、遊びの中で周りの人や自然に関心をもち、発見・驚き・喜び・悲しみ・共感等を繰り返しながら、友達の良さに気づき、小動物や草花を通して感動体験、感情体験をする中で思いやりの心が芽ばえていくことを、幼児の姿から見ることができた
- (3) 幼児は教師の姿勢（言葉・表情・行動）によって、満足感・成就感を味わったり、無気力になったりする。教師は一人ひとりの発達を捉え、個々の心の動きをしっかりと全身で受け止め、共感・承認しながら、思いやりの心を誘発させていくことの大切さを知った。
- (4) 母親は、園での読み聞かせを体験することによって一層幼児理解が深まり、幼児を温かく受け止めるとともに、幼児の心情が広がる働きかけの重要性が理解できた。

2 課題

- (1) 実践記録を分析することで、幼児の育つ姿を明確にし更に適切な援助の手立てとしていきたい。
- (2) 幼稚園教育のねらいは心情・意欲・態度の育成である。いつも基本において保育にあたり、幼児に確かな人間関係を図り、望ましい心身の発達を助長していきたい。
- (3) 保護者へ保育参加や講演会への呼び掛けをする中で、幼稚園に気軽に来園し、いつでも子育てが語り合える場作りに努めたい。

〈主な参考文献〉

小田豊	『一人ひとりを育てる』	ひかりのくに	1994年
文部省	『幼稚園教育指導書』	フレーベル館	1989年
岸井勇雄	『人間関係』	チャイルド社	1990年
永野勇雄	教育心理学	チィルド社	1987年
永野重夫	発達心理学	チィルド社	1992年